

# Hem21

## NEWS VOL.13

財団法人  
ひょうご震災記念21世紀研究機構  
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である  
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Institute の略称です。

## CONTENTS

- 1▶ 1 ころのケアシンポジウム「子どもとトラウマ」を開催
- 2▶ 機構外部評価結果の概要
- 3~4▶ 人口減少時代の日本を生き抜くために  
HAT神戸掲示板
- 5~7▶ 人と防災  
未来センターニュース  
MiRAi
- 8▶ 情報ひろば

## 1 ころのケアシンポジウム「子どもとトラウマ」を開催

# 「子どもが受けた心の傷のケア」の重要性を再認識

兵庫県1 ころのケアセンターの日頃の研究成果の紹介と、心に傷を受けた子ども達へのケアのあり方について考えるシンポジウムを、昨年11月20日(木)に同センターで開催しました。センター開設以来毎年実施しているもので、今年で5回目になります。研究報告とパネルディスカッションに、自治体職員や学校関係者、福祉施設職員、学生など約260人が参加しました。



開会にあたり、当機構の貝原俊民理事長が「四川の大地震では引き続いでいる支援要請を受けている。大災害への対応は人類社会の課題であり、今後とも、大きな使命を果たしていきたい」と述べました。また、井戸敏三知事は「震災以来、培った経験、ノウハウを今後に生かすのが責務。その拠点の一つとして、1 ころのケアセンターの取り組みに期待する」と心のケアの重要性を訴えました。続いて、主任研究員4人が研究内容について報告を行ったあと、パネルディスカッションに移り、「子どもとトラウマ」をテーマに専門家3氏から、子どもが受けた心の傷のケアの方法について発言がありました。

神戸市看護大学の高田昌代教授は、

「夫から暴力を受けるDV(ドメスティック・バイオレンス)と児童虐待は関係が深い。DV被害の早期発見・予防が虐待防止に繋がる」とことを強調しました。

兵庫教育大学大学院の富永良喜教授は、「子どもの恐怖心、ストレス反応は、自然なことであり、否定的な考えを前向きに変えるのが心のケア」と述べ、子どもへの心のケアは「事件・事故後の結果対応でなく、心の健康教育による予防対応が必要である」としました。

甲南大学人間科学研究所の森茂起所長は、子どもの虐待問題について「子どもは、つらい体験を心の中の秘密として他人には語れない。心の安全を確保し、体験を語れる環境づくりが必要」と訴えました。

最後にコーディネーターの加藤寛副センター長が、「子どもの問題は悲観的になりがちだが、災害にあった子どもの9割以上は回復している。子どもの回復力といったところにも目を向けたい」とまとめました。

### 出席者

#### パネリスト

高田 昌代(神戸市看護大学教授)

富永 良喜(兵庫教育大学大学院教授)

森 茂起(甲南大学人間科学研究所長)

#### コーディネーター

加藤 寛(兵庫県1 ころのケアセンター副センター長)

# 機構外部評価結果の概要



当機構では、財団の設立目的に沿って、調査研究や各種事業に効果的かつ効率的に取り組み、社会的責任を果たすべく、平成20年度の外部評価を実施しました。

今年度の外部評価では、平成20年4月に実施した組織の見直し等の結果を踏まえつつ、7月から11月にかけて、「平成19年度の事業・研究に係る取り組み」「各組織の機能」等について、機構で実施した自己点検評価の結果をもとに、各委員による評価結果を全体会議に付し、項目ごとに厳正な評価をいただいたところです。

その結果については、去る12月25日、新野幸次郎外部評価委員会委員長から、貝原俊民理事長に対して報告書が手渡されました。

報告書の概要は以下のとおりですが、大幅な組織の見直しがなされたこともあって、「研究のあり方」に重点を置いた内容となっています。なお、報告書の全文は、当機構のホームページに掲載しています。



## 機構全体の評価

機構全体については、「阪神・淡路大震災という歴史的経験とそこから得られた教訓をもとに中期計画に沿って所定の成果をあげており、さらなる発展が期待される組織である」との評価をいただきました。

あわせて、次の項目について、貴重なご意見をいただきました。

### 研究のあり方

- ・ 政策提言に向けた研究に関する理論の明確化
- ・ 研究システムの構築
- ・ 長期的見地からの研究への取り組みのあり方
- ・ 研究倫理に関する規定策定の検討

### 事業のあり方

- ・ 財源を意識した事業展開
- ・ 印象的な事業の取り組み
- ・ 効果的な発信方法

### 組織・体制のあり方

- ・ 組織改編について

## 研究所・研究部等及び組織別の評価

研究所・研究部等については、「大幅な組織改編が行われ、2つの研究群に分けられた。従って、その成果は、今後一定時間をかけて検討することが望まれる」との指摘を受けました。

組織別の評価については、「昨年度の評価結果をもとに事務処理の適正化と効率化を進めるため、各組織のあり方及び担当事務の大幅な見直しが行われたが、今後の取り組みを見守る必要がある」との指摘をいただきました。

## 研究調査の評価

19年度に完了した20テーマの研究調査については、1テーマに2名の学識経験者を専門委員として委嘱し、査読を行い、評価していただいたところ、次のような項目に関連して、共通する指摘をいただきました。

- ・ 研究調査の進め方と議論の展開について
- ・ 提言について
- ・ 報告文の整理について

## 外部評価委員名簿

**委員長** 新野 幸次郎  
財団法人神戸都市問題研究所理事長

**委員** 天野 明弘  
元 兵庫県立大学副学長  
飯尾 潤  
政策研究大学院大学教授  
木村 陽子  
総務省地方財政審議会委員  
佐藤 友美子  
サントリー文化財団上席研究フェロー

瀧川 博司  
兵庫県商工会議所連合会特別顧問

泊 次郎  
東京大学地震研究所研究生  
(元 朝日新聞社編集委員)

鷺田 清一  
大阪大学総長

# 人口減少時代の日本を生き抜くために

—多自然居住地域の安全安心を考える—



山崎 亮

## はじめに

「多自然居住地域」という言葉があります。読んで字のごとく、多くの自然に囲まれて住まう地域のことを指します。この言葉が生まれたのはそれほど昔のことではありません。かつては農山漁村、中山間地域、あるいは田舎などと呼ばれていた地域のことを、10年ほど前から多自然居住地域と呼び始めたのです。ただし、かつての田舎のイメージではなく、インターネットなどを使って都市的なサービスを受けることができ、オンラインで好きな仕事ができ、豊かな自然に囲まれて広い家に住むことができる。そんな夢のような場所が多自然居住地域だ、ということになっていました。

10年後の現在。果たして、多自然居住地域は今もまだ夢のような場所であり続けているのでしょうか。安全で安心な居住地域たりえているのでしょうか。どうやら状況はあまりよくないようです。

## 多自然居住地域をとりまく現状

多自然居住地域の安全や安心について調べるために、安全や安心を脅かす要因である危険や不安を探すことにしました。これまでの調査<sup>\*1,2)</sup>によると、多自然居住地域における危険や不安は以下のようなものでした。①空き家や空き地が増えていること、②農地や森林を管理する人がいなくなって荒れていること、③野生動物が山から下りてきて農作物を食い荒らすこと、④ゴミの不法投棄が増えていること、⑤地域の伝統芸能が衰退していること。いずれも、集落に住む人が減ること、特に働き手となる若い人が減ることによって生じる不安ばかりです。人が減るから空き家や空き地が増えて、農地や森林が荒れて、野生動物が勢力を拡大して、監視の目が無いから不法投棄が発生し、担い手がないので伝統文化が衰退する、ということです。

それでは、なぜ集落から人が出て行ってしまうのでしょうか。これまでの調査<sup>\*3)</sup>によると、大きな理由は①道路

や交通の条件が悪いから、②農林業では生活できないから、③教育や医療の条件が悪いから、の3点でした。一方、出て行かずに住み続ける人の理由は①土地に愛着があるため、②家や土地を守るため、③集落の人々に愛着があるため、というものでした。



自然倒壊した集落の家屋(兵庫県豊岡市金山廃村)

## 兵庫県における集落の現状

以上の結果を踏まえて、兵庫県における多自然居住地域の現状について調べてみました。県内の多自然居住地域ということで、但馬地域、丹波地域、西播磨地域北部という3地域に絞ってアンケート調査を実施しました。その結果、調査対象地域に住む人たちの不安要因は、①若い人の仕事が少ないこと、②鳥獣害がひどいこと、③後継者のいない家が増えていること、などだということがわかりました。若い人を集落へ呼び戻すための条件としては、①働く場所があること、②子育てしやすい環境であること、③生活の利便性を高めること、などが挙げられました。逆に、「入居先を準備すること」「自然が豊かであること」「伝統行事があること」などは、集落へ戻るための理由にはならないことがわかりました。集落の維持については、「今後も自分たちの力だけで集落を維持することができる」と回答した集落が丹波地域や但馬地域に多く、西播磨北部地域では「自分たちだけでの集落維持が難しい」と感じている集落が多いことがわかりました。

## 多自然居住地域への対応策

今後の多自然居住地域への対応策としては、以下のようなことが考えられます。まずは「集落の健康診断」が必要です。高齢者の人口が半分以上を占める集落を単純に「限界集落」と呼ぶのではなく、集落の共同作業が困難になってきているか、不法投棄などの実害がないか、将来集落に戻ってくる可能性のある人が何人いるのか、などを把握した上で、集落の健康状態を判断することが重要です。健康診断と同じように、客観的なデータ(集落の人口や高齢化率、中核都市からの距離や標高差など)と、主観的なデータ(環境や施設の荒廃度合い、安全安心の低下度合いなど)とを合わせて表現する「集落レーダーチャート」を作成すると、集落の健康状態を診断しやすくなります。チャートに調査対象全集落の平均値を示せば、自分たちの集落がどんな特徴を持っているのか把握しやすくなるでしょう。データから客観的に判断すれば状況は厳しいはずなのに、本人たちは「まだまだ大丈夫だ」と考えている集落もあるでしょうし、その逆もあるでしょう。各集落にレーダーチャートを示すことによって、まずは自分たちの集落の現状を知ってもらうことが重要です。

## 各集落の高齢化率



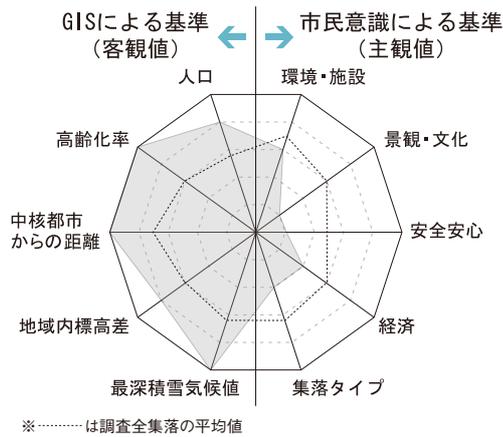
さらに、現在の健康状態だけでなく将来の健康状態を知ることが重要です。このまま何もしないと、あと何年で集落が消滅するのかを予測して集落居住者に示すのです。そのうえで集落居住者が集まるワークショップを開催し、10年後、20年後、30年後に集落へ戻ってくる予定のある人がどれくらいいるのか、その人たちだけでどれくらいの農地や山林を管理できるのか、管理できない空間はどうするのか、などを話し合います。

集落の健康状態はそれぞれ異なるでしょう。予防し続けられれば現状を維持できる集落もあれば、治療が必要な集落もあります。あるいは、すでにかなり健康状態が悪化していて、居住者が撤退を考えている集落もあるでしょう。そのとき、行政はそれぞれの方向性(予防・治療・撤退)に応じた施策のメニューを準備しておくことが重要です。①効率的な集落運営のしくみづくり、②集落のリーダーづくり、③集落支援員の派遣、④広域支援拠点の設置、⑤都市部の自治会とのマッチング、⑥空き家バンクの整備、⑦福祉バスや移動販売、⑧集落撤退後の空間管理方策検討、⑨伝統文化のアーカイブ化など、多様な施策を用意しておき、必要なメニューを集落が選んで自ら実施していけるような体制を整えるべきです。

な役割を担っています。食料自給率の向上、温室効果ガスの低減、低炭素型ライフスタイルの実現、保水機能による洪水防止、都市災害時のバックアップ空間など、その役割は都市部に住む人々にとっても無関係なものではありません。さらに、全国的に人口が減少する時代には中心市街地や郊外住宅地でも集落と同じような課題が生じることになるでしょう。集落における取り組みは、近い将来に都市部で発生する課題を解決する際のヒントになるはずで、人口減少時代の日本で僕たちが安全で安心な暮らしを実現できるように、今のうちから多自然居住地域における安全や安心を確保する方策について検討しておくべきでしょう。

- ※参考文献  
 1.国土交通省「国土形成計画策定のための集落の状況に関する現況把握調査」2006  
 2.国土交通省「集落の衰退による地域の社会基盤への影響に関する調査報告書」2000  
 3.農村開発企画委員会「限界集落における集落機能の実態に関する調査報告書」2006

集落レーダーチャート(案)



おわりに  
 多自然居住地域はいろいろ

HAT神戸 掲示板

JICA兵庫

研修コースを一般公開します!

JICA兵庫が実施する海外技術研修員受け入れ事業を市民の皆さまに知ってもらうために、研修コースの一部を公開します。

- 公開日: 2月16日(月)
- 場所: JICA兵庫 セミナー室
- 公開テーマ: 途上国との関係からひもどく食の安全性
- 研修コース名: 食品微生物検査技術
- 参加国: 中華人民共和国・スリランカ・タイ
- 公開内容: ジョブレポート発表
- URL [http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kenshu/course/h20\\_public.html](http://www.jica.go.jp/hyogo/enterprise/kenshu/course/h20_public.html)

APNセンター

APN国際セミナー  
 「生物多様性と人との調和及び共生を目指した自然共生社会」

生物多様性に焦点をあてるAPN国際セミナー。3回目となる今回は、人為的な開発行為が及ぶことによる変動が多くの生物を絶滅の危機に直面させている現状から、生物多様性の現状や我々が受けている恩恵について理解を深めます。また、自然と人、具体的には生物多様性を保全するために必要な調和のとれた社会のあり方を、アジア・太平洋地域や兵庫県内での農業や林業における具体的な取り組み事例等を通じて考え、議論します。

- 日時: 2月1日(日) 13:00~17:00
- 場所: 兵庫県立美術館ミュージアムホール(神戸市中央区脇浜海岸通)
- 参加費: 無料
- 申し込み: APNセンター
- TEL: 078-230-8017 Eメール [seminar@apn-gcr.org](mailto:seminar@apn-gcr.org)

兵庫県立美術館

ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密展

ハプスブルク家の400年にわたる遺産をもとに開館した、ウィーン美術史美術館。その大コレクションのうち風俗画や肖像画75点を展示します。日本初公開となるベラスケス〈薔薇色の衣裳のマルガリータ王女〉など、傑作の数々に触れられる稀有な機会です。



©KunsthistorischesMuseumWien, Gemäldegalerie, Vienna

- 会期: 1月6日(火)~3月29日(日)
- 観覧料: 一般1,300(1,100)円、高大生900(700)円、小中生500(300)円( )は前売りおよび20名以上の団体割引料金

- 休館日/月曜(祝日の場合は翌火曜)
- 開館時間/10:00~18:00(特別展開催中の金・土曜は20:00まで)入場は閉館の30分前まで
- TEL: 078-262-0901 URL <http://www.artm.pref.hyogo.jp/>

日本赤十字社兵庫県支部

ひょうご安全の日推進事業「災害対応力を身に付けよう!!」  
 防災イベントを開催します。

災害時や日常生活において役立つイベントを開催します。参加無料となっておりますので、ぜひ皆さんもご参加ください。



- 日時: 2月11日(水・祝) 12:00~15:00 荒天中止
- 場所: 神戸市立中央小学校グラウンド(駐車場はありません)
- 内容: AED(自動体外式除細動器)を用いた心肺蘇生法のミニ講習及び体験、三角巾を使った応急手当の体験、非常食・味噌汁の炊き出し無料試食 など
- 問い合わせ: 日本赤十字社兵庫県支部 奉仕課
- TEL: 078-241-8922 URL <http://www.hyogo.jrc.or.jp/>

# 人と防災未来センター 平成20年10大ニュース

## 1月

### ■防災未来館リニューアルオープン

防災未来館をリニューアルし、センターオープン以降の復興過程資料を追加するとともに、ボランティアによるガイドツアーの実施など来館者に一層分かりやすい展示の工夫を取り入れました。

### ■センターで1.17関連イベント

センターが事務局や会場となって、災害メモリアルKobe2008(1月13日)、ひょうご安全の日1.17のつどい(1月17日)など、様々な1.17関連イベントが開催されました。

## 3月

### ■国連SASAKAWA防災賞受賞記念 国際防災・人道支援フォーラム2008開催

河田センター長が2007年10月に国連SASAKAWA防災賞を受賞したのを記念して、京都大学防災研究所の協力のもと、国際防災・人道支援フォーラム2008、および受賞祝賀会を神戸ポートピアホテルで開催しました。

## 5月、6月

### ■四川大地震、岩手・宮城内陸地震発生、 現地調査実施

四川大地震、岩手・宮城内陸地震に対し、現地に派遣団を送りました。四川大地震以降、中国から阪神・淡路大震災の教訓を学びにいらっしゃる来館者が増えています。

## 6月

### ■来館者300万人達成

開館から1,910日目の6月10日(火)に300万人目の観覧者をお迎えすることができました。

## 7月、8月、10月

### ■トップフォーラム各地で開催

知事、市長など自治体トップを対象とした防災研修である「トップフォーラム」を兵庫県、新潟県、滋賀県で実施しました。

## 7月

### ■「平成19年度中核的研究プロジェクト報告書 —災害対応の10の要諦—」公表

自治体向け提言書「災害対応の10の要諦」を作成、公表しました。センターホームページで公開中ですので、ぜひご覧ください。

## 8月

### ■秋篠宮ご一家ご来館

秋篠宮ご夫妻と眞子さまがセンターをご訪問され、河田恵昭センター長のご案内で熱心にご見学なさいました。5月には高円宮妃殿下もご来館なさいました。

## 7、8、9月

### ■夏休み防災未来学校2008の開校

はばタン防災教室など、子どもが楽しみながら防災・減災について学べる新企画や、震災上映会など各イベントを巡るスタンプポイント制を導入するなど内容を充実し開校しました(7月20日～9月7日)。多彩なイベントに、昨年を上回る1,700人以上の参加がありました。

## 8月、9月

### ■ユース語り部事業実施

文部科学省採択の「防災教育支援事業」の一環として、これからの社会を担う立場になりつつある、震災当時子どもだった世代の方の当時の体験談や、その後の歩みについて語る「Talk! ユース震災語り部」イベントを実施し、さらにDVD防災教材として作成した彼らの語りの映像を防災未来館で公開中です。

## 山本保博・人と防災未来センター上級研究員 平成20年防災功労者 内閣総理大臣表彰受賞

山本保博・人と防災未来センター上級研究員(日本私立学校振興・共済事業団 東京臨海病院院長)が、平成20年防災功労者内閣総理大臣表彰を受けました。

国際緊急援助隊の体制確立などの取り組みにより、我が国における組織的な災害対策・防災体制の強化に寄与したこと、自動体外式除細動器(AED)に関する講習プログラムの確立をしたことにより救命体制が構築され防災体制の強化・拡充が図られたこと、コールトリアージ、救急救命士の再教育プログラム及び消防と医療との連携体制の構築について具体的な対策を提示したこと。これらの災害時救命体制の確立に多大なる貢献をしたことが功績として認められ、今回の受賞となりました。

### 防災功労者内閣総理大臣表彰とは・・・

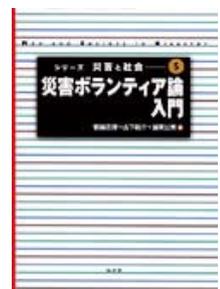
毎年9月1日を「防災の日」とし、「政府、地方公共団体等関係諸機関を始め、広く国民が、台風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波等の災害についての認識を深めるとともに、これに対する備えを充実強化することにより、災害の未然防止と被害の軽減に資する」という趣旨に基づき、内閣総理大臣が表彰を行うものです。

## 図書紹介

### 『災害ボランティア論入門』

著者：菅 磨志保・  
人と防災未来センター・  
リサーチフェロー(大阪大学  
コミュニケーションデザイン・  
センター特任講師)ほか

弘文堂 2008年12月刊  
A5判上製266ページ  
定価2,730円(税込)



### 著者からのメッセージ

1995年、阪神・淡路大震災を契機に、日本社会に新しい共同性と公共性をもたらし、日本の市民活動を牽引する役割を果たしてきた「災害ボランティア」は、その後、現在までの間に何を生み出し、今後どこに向かおうとしているのか。本書は、研究者・活動実践者・実務家らが、それぞれの立場からこの問いに答え、理論—実践—思想という3つの側面から包括的に説明しようとする試みです。NPO法定10年を迎える今、災害と市民活動を考えるきっかけを提供できれば幸いです。

## 平成20年度災害対策専門研修マネジメントコース(秋期)の実施結果

人と防災未来センターでは、地方自治体職員などを対象とした「災害対策専門研修」を平成14年度から実施しています。これまで延べ1,600人以上の方に受講いただき、研修への信頼性も増えています。

今回は、10～11月に実施した防災担当部局の一般職員等を対象としたマネジメントコース(秋期)について、その実施結果をご紹介します。

マネジメントコースは、災害対策実務の中核を担う人材の育成を目的とし、阪神・淡路大震災の教訓を学習することに重点しつつ、最新の研究成果を取り入れ、能力に応じた体系的、実践的なカリキュラムを設計しており、今回は、近畿圏を中心に北は宮城から南は熊本まで全国各地からの参加がありました。

なお、秋期のみ開催するアドバンスコースについては、特設「防災監・危機管理監コース」と併設して実施しました。



演習での模擬記者会見風景

コース名	日程	参加人数
ベーシック	平成20年10月6日(月)～10月10日(金)	37名
エキスパートA	平成20年10月20日(月)～10月24日(金)	20名
エキスパートB	平成20年10月27日(月)～10月31日(金)	21名
アドバンス/防災監・危機管理監	平成20年11月4日(火)～11月5日(水)	15名
合計(延べ)		93名

当研修は、平成21年度も開催する予定ですが、研修内容をより一層効果の高いものとするため、これまでの受講者のニーズ、反省点、社会的な要請等を十分に踏まえ、継続してカリキュラムの検討をしています。

## 震災報道の歴史的検証シンポジウム報告

板垣貴志 (人と防災未来センター震災資料専門員・歴史資料ネットワーク副事務局長)

去る2008年12月7日、歴史資料ネットワーク主催シンポジウム「震災・記憶・史料～阪神・淡路大震災報道の歴史的検証～」を人と防災未来センターで開催いたしました。歴史資料ネットワークは、阪神・淡路大震災の時に被災史料の救出を目的に歴史研究者が結成したボランティア団体(代表:奥村弘神戸大学教授)です。

このシンポジウムは、歴史研究者が多用している「新聞」の史料の意義や限界を、阪神・淡路大震災報道を対象に考える趣旨で行いました。当センターの所蔵する震災資料群のなかには、切り抜きされた新聞が膨大に含まれています。これは被災市民自らが新聞を史料化していったと表現することもできます。私は、前々からこの現象が非常に気になっていました。つまり寄贈された膨大な新聞スクラップ史料は、被災地全域で「大震災は後世に伝えるべき歴史的事件」という共通認識があったことを雄弁に物語っており、また歴史学が大震災を研究対象とする際に、まず「新聞報道」に着目する意義があると考えました。

報告内容は、元朝日新聞編集委員で関西学院大学教授の山中茂樹氏「史料化阻む3つの陥穽－震災報道からみた1つの論点－」、読売新聞東京本社編集委員の堀井宏悦氏「阪神・淡路大震災報道の検証－東京の記者の記憶から－」、神戸新聞社会部の石崎勝伸氏「14年間の震災報道－現場からの報告－」でした。山中氏からは、温度差報道、客観報道主義、デジャブ報道の3つのキーワードを用いて総括的な報告があり



右より山中茂樹氏、堀井宏悦氏、石崎勝伸氏、佐々木和子氏、司会 大國正美氏

ました。その上で、東京での震災報道の実態を堀井氏より、被災地神戸の地元紙として、長年震災報道を続けてこられた石崎氏より報告がなされました。次に、歴史学の立場から神戸大学地域連携研究員の佐々木和子氏よりコメントがあり、3者の報告を、順に周辺部、外部、内部と整理され、新聞を読み解く際の複眼的な視野の獲得の必要性が説かれました。

最後に、報告者・コメント・司会に参加者を含めた討論の場では、多様な意見が飛び交い、議論が深められたように感じました。今後も、史料を生み出す現場の報道記者と、史料を批判的に読み解く歴史研究者との共同作業を続けていきたいと思っております。

## 平成20年度JICA地域別特設研修「中米防災対策コース」の実施結果

人と防災未来センターでは、中米地域6カ国(コスタリカ、エル・サルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、パナマ)を対象に、JICA地域別特設研修「中米防災対策コース」を平成14年度から実施しています。

今年で7回目となる同研修では、対象国から各2名の研修員に、メキシコ等からオブザーバー2名を加え、計14名の各国政府又は地方自治体の防災担当職員に対して、約5週間の研修を行いました。

阪神・淡路大震災の経験と教訓を中心に日本における先進的な防災・減災に対する取り組みを学ぶため、人と防災未来センターでの講義・見学のほか、神戸学院大学防災・社会貢献ユニットや神戸市立なぎさ小学校での日本における防災教育に関する研修、内閣府、気象庁、NHKなどでの全国レベルの災害対策についての研修、南海地震や台風、津波対策に取り組んでいる高知県、四万十町でのより地域やコミュニティに根ざした減災への取り組み、などについて研修を行いました。

最後には、これら延べ約40時間に及ぶ研修結果を踏まえて、それぞれの国や地域での取り組みに生かすためのアクションプ



ログラムを策定した後、各々プログラムの発表と講評を行って、12月5日に閉講しました。

研修員それぞれのこの研修成果を活用した自国での減災に対する取り組みと、滞在中に構築された人的なネットワークを生かした今後の活躍を期待しています。

なお、この研修は、平成21年度も開催する予定ですが、カリキュラム内で行われた評価会やJICA兵庫との協議を踏まえて、研修効果をより一層高めるために、継続してカリキュラム等の検討を行うこととしています。

## 第4回震災映像資料上映会「大震災に立ち向かった消防隊員」を開催しました

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターでは11月24日に『市民が撮った映像アーカイブ』、『オレンジ』の2本の上映と、元東灘消防署長の西村幸造氏による講演〈第4回震災映像資料上映会「大震災に立ち向かった消防隊員」〉を開催しました。様々な年代の59名の方にご参加いただきました。

『市民が撮った映像アーカイブ』は、被災当時、実際の火災現場を被災者(神戸市職員)が撮影した作品です。

『オレンジ』は、綿密な取材をもとに制作された消防隊員が主人公のアニメーション作品で、あのとき起こっていたことを描いた心にせまる映像に、涙ぐむ方も多数おられました。

講演していただいた西村幸造氏は震災当時、神戸市東灘消防



上映中の様子

署長だった方です。東灘区は神戸市内で最大の被害が発生した場所で、支援のために派遣された、北は北海道から南は長崎県までの108消防本部の部隊を指揮、消火や救助活動にご尽力されました。その当時のことについて熱く語られ、講演後は多くの質問が寄せられました。



参加者に前に講演する西村氏

上映会終了後、「震災の時の事を忘れつつあったので、思い出すきっかけとなった。消防隊員の方の大変さもよくわかった」「当時、消防職員が

取らざるを得なかった行動の理由と彼らの苦悩が理解できました。同時に「今私たちに必要なこと」を教えてくれていると思います」などたくさんのご感想をいただきました。

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

### 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

観覧案内・予約 / TEL: 078-262-5050 URL <http://www.dri.ne.jp/>

開館時間 9:30～17:30(入館は16:30まで)

\*7～9月は9:30～18:00(入館は17:00まで)

\*金・土曜日は9:30～19:00(入館は18:00まで)

入館料金

\*団体は20名以上

区分	防災未来館		ひと未来館		両館とも	
	個人	団体	個人	団体	個人	団体
大人	500円	400円	500円	400円	800円	640円
高校・大学生	400円	320円	400円	320円	640円	510円
小・中学生	250円	200円	250円	200円	400円	320円

兵庫県内の小・中学生はココロカード提示で無料。

障害をお持ちの方、兵庫県内在住の高齢者は上記の半額。

休館日

毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日

\*ゴールデンウィーク期間中(4月28日から5月5日まで)は無休

交通

鉄道 阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分

・JR「灘」駅南口から徒歩12分

・阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分

バス 三宮駅前から約15分

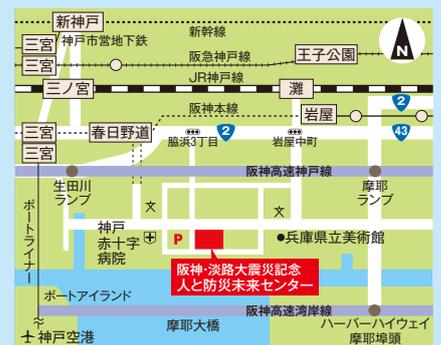
・阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分

・阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分

・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分

●有料駐車場(普通車100台)

●バス待機所(予約制/無料)あり



## こころのケアセンター

### 平成20年度 兵庫県音楽療法士認定証交付式・記念講演会・実践活動発表会 参加者募集

兵庫県音楽療法士認定証交付式をはじめ、音楽評論家・作詞家の湯川れい子氏の講演会、実践活動発表会を開催します。

- 日時：3月17日(火) 13:00~16:00
- 場所：兵庫県こころのケアセンター
- 定員：200名(先着順)
- 参加費：無料
- 申し込み開始：2月5日(木)~
- 申し込み方法：所定の参加申込書(※)に必要事項を記入のうえ、郵送、FAXまたはEメール(必要事項を明記)で下記までお申込みください。  
※兵庫県こころのケアセンターのホームページからプリントアウトできます。



- 申し込み・問い合わせ先：  
兵庫県こころのケアセンター-事業部事業課  
TEL:078-200-3010 FAX:078-200-3017  
Eメール college@dri.ne.jp

## 学術交流センター

### 平成20年度 21世紀文明シンポジウム 「21世紀の日本人の生き方を考える —いま問われる規範意識とは—」 参加者募集

行政関係者・県民等が一堂に会し、21世紀の諸課題について、幅広い観点で議論を深める「21世紀文明シンポジウム」。今、公共空間での迷惑行為をはじめ、家庭内殺人などに至る家庭崩壊といった、今までの価値観とは違う新しい日本人の規範意識に変化が生じています。同シンポジウムでは、私たちが守るべき21世紀の規範意識について、学識者の議論を通じて、改めて考えていきます。

- 日時：2月20日(金) 13:30~16:30
- 場所：クラウンプラザ神戸10階 ザ・ボールルーム (JR新神戸駅すぐ) TEL:078-291-1121
- 内容：  
I.基調講演  
曾野 綾子(作家)「世界の中の日本人」  
II.パネルディスカッション(パネリスト(50音順))  
玉岡かおる(作家)  
山極 寿一(京都大学大学院理学研究科教授)  
山田 昌弘(中央大学文学部教授)  
(コーディネーター)  
野々山 久也(当機構共生社会づくり研究群研究統括、甲南大学文学部教授)
- 定員：250名 ※定員になり次第締め切り
- 申し込み・問い合わせ先：  
学術交流センター 交流推進課  
TEL:078-262-5713 FAX:078-262-5122  
Eメール gakujutsu@dri.ne.jp

## 研究調査本部

### 安全安心なまちづくり政策研究群 研究成果報告会開催 参加者募集

安全安心なまちづくり政策研究群では、平成18年度から実施してきた下記3つのテーマの研究成果がまとまったため、行政担当者はもとより、広く県民の皆様にその成果を発表する機会を設けます。参加費無料ですのでふるって参加下さい。

#### 研究テーマ

- (1)自然災害を始め、社会の様々な不安に対する安全・安心の仕組みづくりの方策  
山下淳上級研究員(関西学院大学教授)、  
石田祐常勤研究員
- (2)大災害に備えた我が国危機管理機能のバックアップ体制のあり方  
秋月謙吾上級研究員(京都大学教授)、紅谷昇非常勤主任研究員
- (3)多自然居住地域における安全・安心の実現方策  
中瀬勲上級研究員(兵庫県立大学教授)、山崎亮非常勤主任研究員

- 日時：3月中旬 13:00~17:00(予定)  
※各報告とも1時間程度
- 場所：神戸市内  
(兵庫県民会館を予定)
- 定員：各回80名程度
- 申し込み方法等：開催日時等が決定次第、機構HPでご案内いたします。  
URL <http://www.hemri21.jp/>



## Hem21NEWS vol.13

平成21年1月発行



(財)ひょうご震災記念  
21世紀研究機構

〒651-0073  
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2  
(人と防災未来センター)

▼URL  
<http://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

- 管理部  
TEL 078-262-5580  
FAX 078-262-5587
- 研究調査本部  
TEL 078-262-5570  
FAX 078-262-5593
- 人と防災未来センター  
TEL 078-262-5050  
FAX 078-262-5055
- 学術交流センター  
TEL 078-262-5713  
FAX 078-262-5122
- こころのケアセンター  
〒651-0073  
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2  
TEL 078-200-3010  
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・ご感想を機構までお寄せ下さい

伝えたいことを“カタチ”にするプランニングとデザインで  
新しいコミュニケーションツールをご提案します。

**IDÉE INC.**  
Graphic Design & Editorial Works

株式会社イディー 〒650-0024 神戸市中央区海岸通8番 神港ビルディング5F TEL.078-331-5255 FAX.078-331-7800  
<http://www.ideoe-kobe.co.jp> e-mail [ideoe@circus.ocn.ne.jp](mailto:ideoe@circus.ocn.ne.jp)